

●図書紹介●

『人はなぜいじめめるのか — 地域・職場のいじめと子ども時代の体験 —』

ピーター・E・ランドール 著／新井郁男 訳

本書は、英国ハル大学の心理学者P.ランドールによって上梓されたものである。表題が示すように、地域や職場で大人どうしの間にどのようないじめが実際にあるのかを明らかにし、それらが子ども時代の体験とどのように関連しているかの分析を通して、いじめの本質に迫ることを目指している。

本書ならではの特色と思われる点をあげてみると、①まず、著者自らが200人を超える大人のいじめの加害者および被害者の面接を行い、その事例を丁寧に分析している点に好感がもてる。しかも、具体的事例の分析を行っていくうえで、247にのぼる学術的文献が参考にされており厚みのある内容となっている。実践と理論のいずれかに偏りがちな類書が多く見かけられるなかで、本書はバランスのとれた編集がなされている。

②内容面で圧巻なのが、たくさんの事例分析を通して、大人のいじめ被害者の多くが子ども時代の心的外傷後ストレス性障害（Post Traumatic Stress Disorder: PTSD）を引きずっている事実を明らかにした第6章である。とくに、「児童期のPTSDの処置が不適切だと成人になってから精神衛生上および適応上の問題がおこる……（中略）……いじめ被害者に対する対応が不十分または不適切だと、成人期に問題が起こると考えることは妥当であろう」（169頁）とする知見は、注目に値すると言えよう。

③本書は、いじめの本質に迫るだけでなく、いじめ防止のための戦略についても、多くの頁をさいて、著者自らが開発した認知的－行動的アプローチの実際を紹介している。しかも、7章以降に示されている「管理職のためのガイドライン」と「従業員支援プログラム」のなかには、学校におけるい

じめ防止のためのストラテジーとしてもそのまま援用できる内容が多く含まれている。

あえて注文をつけるとすれば、本書には、今後学校教育の分野においても注目されると思われる専門用語が数多く用いられている。巻末に用語索引があればなおよかったが、この点は今後の改訂に期待したい。

訳者も序で触れているように、社会学・心理学・精神医学関連の用語が随所に用いられているが、とくに専門的知識がなくても理解できるように書かれている。学校におけるいじめを直接扱ってはいないが、いじめの本質と最新の対処法を学ぼうえて、学校関係者にもぜひ一読していただきたい好書である。

(上越教育大学 犬塚文雄)

●教育開発研究所，A 5 判，269頁，2,500円(本体)